ルカ、キスしたことある？

ピーナッツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルカ、キスしたことある？

【Ｎコード】
Ｎ５０８０Ｚ

【作者名】
ピーナッツ

【あらすじ】
ミクとルカがキスする百合なお話です。

昼下がりのリビング。けだるい時間が流れている。

リンとレンは新曲のレコーディングに行っていて、ミクとルカが家に残っていた。

二人は長いソファの左右に座って、ルカはファッション雑誌を、ミクはテレビを見ている。

ミクが全然テレビに集中していないことに、ルカは気付いていた。

視線がときおり自分に向けられるのだ。

ルカは雑誌を読みつつ、しばらくは気付かない振りをしていた。

何か話でもあるの？そう聞こうとしたらミクがテレビを消した。

「…ねえ、ルカ」

やっぱり。

「何？」

ルカは雑誌から目を離さず、紅茶のカップに口をつける。

「…キスしたことある？」

ケホッ、とルカが軽く咳き込む。

「こぼしそうになったじゃない。昼間っから唐突ね」

「教えてよ。あるの？」

ミクは真面目な顔をしている。

「あるわよ」

「誰と？」

「誰とって、生まれてからはないけど、わたしはそういう仕様になってるから、あらかじめメモリーに入ってるの」

ふーん、とミク。

「どうしたの？好きな人でもできた？」

そういうんじゃなくって、といいながらクッションを抱く。

「ほら、キスが出てくる歌って多いじゃない。あたし、したことないから、気持ちが入らないの。シーケンス通り歌ってるだけで…」

なんだ、歌のことか。

天然だけど歌うことに関してはすごく真摯なのよね、この子。

「それは仕方ないんじゃない？シンガーソングライターじゃないんだから、経験したことだけ歌うわけにはいかないでしょ」

ソファの肘掛にあずけていた身体を起こし、ミクを諭す。

「それにあなた、卑猥な歌詞もいっぱい歌ってるでしょ。そういうのはいいの？」

「そんなのは論外だけど、キスくらいは知ってた方がいいのかなって」

生真面目ね、とルカはいった。
中世の画家で『天使は見たことがないから描かない』と宣言したのは、クールべだったっけ？

「キスしてみたいっていったって、相手が要るでしょ」

「そこをルカに相談しようと思って」

「あ、レンにキスしちゃダメよ！」

「あたしショタじゃないし、そんな悪戯みたいなことしません」

青少年保護の観点から慌てて注意したルカに、ミクはさらっと答えた。

「じゃあカイト？」

「生々しいでしょ、勘弁して」

「じゃあ誰がいいの？まさかクリプトン以外？あ、Pさんとか？」

そう言ってミクに向き直ったルカは初めて、彼女が思いつめたように見つめているのに気付いた。

「…なによ？そんな眼で見て…。え？ええ！？わ、わたしなの！？」

激しく動揺するルカ。

「お願い、歌のためと思って協力して」
ミクが手を合わせて拝む。
「どういう思考回路でそんな結論になるの！？あなたのファーストキスでしょ！」
「女同士だし、ノーカウントってことで」
「女同士だからまずいんでしょ！あなたレズっ気あったの！？」
「ないわよ。キスはしたいけど、男はちょっとこわいの…」
ルカが溜息をつく。
「向上心は立派だけどね、ミクは平気なの？わたしで」
「ルカなら全然オッケーだよ。…ルカは、嫌？あたしとキスするの…」
ミクが潤んだ瞳で見つめる。
もう…そんなチワワみたいな眼で見つめないでよね。
「…嫌かっていわれると、別にぜんぜん嫌なことないのよね…。もう、こんなこといっちゃうと断る理由なくなっちゃう」
あきらめ顔のルカ。逆にミクの顔が輝く。
「じゃ、いいよね！ありがと！ルカ、大好き！」

早速とばかりに、ミクが顔をちょっと上向き加減にして目を閉じる。
ルカはくすりと笑い、人差し指でミクのおでこをつついた。
一応緊張して身構えていたミクが、きょとんとした顔で目を開く。

「焦んないで。こういうのって、ムードがあるでしょ」

ルカはミクの両肩に手を置いた。

「…どうする？抱き合ってみようか？恋人同士みたいに…」

肩に置いた手をするりとミクの背に回し、そっと抱き寄せる。
身体が密着すると、ルカは少し力を込めて、ミクをギュッと抱いた。

（…へえ、この子痩せすぎだと思ってたけど、意外に柔らかくて抱き心地いいのね）

余裕でそんな感想をいだいていたルカに対し、突然抱きしめられたミクはびっくりして戸惑っていた。

「…ミク、肩の力、抜いて。深呼吸してごらん」

ミクはゆっくりと深呼吸した。喧嘩してる猫みたいに上がっていた肩が、静かに元の高さに落ち着いていく。
リラックスすると、ルカの女らしい魅惑的な身体を感じる余裕がでてきた。
どうしていいか分からず宙を泳いでいた腕を、おずおずとルカの背に回す。

ミクの身体から緊張が解けてくるのを感じると、ルカは顔を寄せて

頬を合わせた。
仔犬がじゃれ合うように頬を擦り合わせながら、耳元でささやく。
「…ミクのほっぺ、すべすべで気持ちいい…ねえ、ミクは、どう？」
「…気持ちいい…抱き合うのって、こんなに気持ちいいんだね…」
ルカの背に回された腕に、ギュッと力がこもる。
（だいぶ気持ちができてきたみたい…そろそろいいかな？）
ルカは身体を覆い被せるようにして、ミクをソファに押し倒した。
今にも唇が触れ合いそうな距離で見つめあう。
眼がとろんとして、普段見たことのない表情のミクは、ルカがドキッとするほど可愛かった。
「…ミク、可愛い…天使っていわれてるだけあるわね。わたし、本気でキスしたくなってきちゃった」
恥かしさでミクの頬が赤く染まる。
「…ルカも、きれい。あたし、ずっと前から、ルカのことときれいだなって思ってたよ…」
「ふふ、ありがと…」
ルカがミクの唇を人差し指でなぞる。
「ぷるぷるね…虜にされそう…」

ルカはそっと唇を重ねた。
初めてのキス。柔らかな感触にミクは陶然となった。
唇から快感が流れ込んでくるようだ。

（可愛い…）

無心で唇に吸い付いてくるミクを、ルカは心から愛おしく思った。

（スイッチ、入っちゃった…）

ルカがミクの唇に舌を這わせる。
ミクはビクッとして薄目を開けたが、すぐに力を抜いて、されるがままになった。
ルカがノックするように舌で唇をつつくと、ミクは少しだけ口を開いた。
すぐにルカの舌が滑り込み、奥に潜んでいたミクの舌に絡みつく。
ミクはわけの分からないまま、快感に任せて夢中で舌を絡めた。

☆

五分も経ってから二人はようやく唇を離した。
ルカの呼吸も荒いが、ミクは百メートル走でも走ってきたように息も絶え絶えだ。
ルカが手の甲で口元の唾液を拭う。

（やりすぎちゃったかな…）

放心状態で寝転んでいるミクを見て、ルカはちょっと反省した。
ようやく正気が戻ってきたミクが、のろのろとソファに身を起こす。

「大丈夫？ミク」

「う、うん。ちょ、ちょっと、想像してたのよりすごすぎて…」

ひとつ大きく深呼吸をする。

「…ねえ、ルカ」

「何？」

「…初めてのキスって、普通こんなに激しいもの？」

思わず我を忘れてしまったのが恥かしくなって、ルカの顔が赤くなった。

「なんか盛り上がっちゃって」

「フレンチキスでよかったのに…」

「ごめんね、ミク。あなた初めてだったのに…嫌だった…？」

「…嫌かっていわれると、全然そんなことないんだけど…」

ミクはついさっきルカがいったような答え方をした。

「…溶けちゃいそうって何百万回も歌ってきたのに、初めて意味が分かった…」

「そう？ミク、わたしも気持ちよかった…」

二人ともなんだか恥ずかしくなって、会話が途切れた。

「…ねえ、ルカ、今してよ」

ミクの方が先に口を開いた。

「え？してって？」

「フレンチキス、今してよ」

ミクが眼を閉じる。

ルカはくすっと笑って、顔を寄せた。

二人は小鳥のようなキスをした。

☆

玄関のドアを開ける音がして、二人は慌てて左右に散った。

リンとレンが帰ってきたようだ。

「ただいまー」×2

バッグを抱えてリビングに入ってくるリンとレン。

「お、お帰りなさい」×2

リンが怪訝そうな顔で二人を見る。

やんちゃなレンと違い、リンはやたら勘の鋭い子で、場の空気を敏

感に読み取る。

「…何してたの？テレビもつけないで」

「ミクと話してたの、ライブのこととか、ね？」

ミクがうんうんと首を振って頷く。

「ミク姉？寝てたの？」

「え？何で？」

「よだれの跡が…」

え、ウソ、といってミクは洗面所へかけて行った。
ルカは思わず手を口元にやりそうになったのをグッとこらえた。
さっき手の甲で拭ったから、わたしによだれは付いていないはずだ。

リンの視線があらゆる物を素早くチェックする。
ルカの着衣の乱れ、ソファのしわ、飲み残しの紅茶…。
ルカは素知らぬふりをしていたが、ミステリー小説の犯人になったような気持ちだった。

結局リンは何もいわず自分の部屋に行った。
戸が閉まる音が聞こえてから、ルカは大きな溜息をついた。

☆

一ヵ月後。

ミクたち四人は、レッスンルームに集まっていた。
仕事のない日は歌のレッスンを欠かさない。
リンが新曲に苦戦しているようだ。

「何かノレないのよね。難しい曲でもないのに、何でだろ？」

ミクがシーケンスファイルをチェックする。

「リンには難しい曲じゃないはずだけどね」

「でしょ」

「となるとやっぱり歌詞かなあ」

「あ、あたしの苦手な発音バカにする気だ」

リンがふくれっ面になる。
負けず嫌いなリンは、持ち歌の数やキャラクターグッズの売り上げで大きく水をあけられているミクに、強い対抗心を持っている。

「そんなんじゃなくて、初キッスの歌なのに、リンがしたことないからじゃないの？」

（あ、バカ）　ルカが右手で顔を覆う。

リンが明らかにカチンときた顔をした。

「ミク姉だってないでしょ！」

「……」

「…何？今の沈黙？ミク姉、キスしたことあるの！？」

前述のとおり、リンは勘が鋭い。

「いや、ないない、ないってば」

「ウソ！ミク姉がウソつくときの癖が出てる！」

「え、そうなの？もう、教えてよ、その癖っての！」

実はそんな癖はないのだが、ミクはいつもこの手でウソを見破られている。

「ミク姉アイドルなんだから！週刊誌にでも撮られたどうすんのよ！もう！いったい誰としたの！？」

ミクが助けを求めるようにチラッとルカを見る。

ルカはそっぽを向いて犬を追い払うようにシッ、シッ、と手を振った。

「…ルカと」

仕方なくミクが白状すると、リンの背後にピシャーンと稲妻が落ちた。

リンはミクに対抗意識を燃やしているが、ルカには甘えている。

プライドが高くいつも気を張っているリンは、ルカを心のよりどころにしているのだ。

「ルカ姉！ホントなの！？」

「そうなんだけど、歌のためよ。ミクがどんな感じかどうしても知りたいっていうから…」

「あっ！あたしとレンがレコーディング行ってたときだ！」

「どうしてあなたはそう勘が鋭いの…大したことないのよ、ちょっとチュッってしただけだから」

ルカがなだめるが、リンは顔が真っ赤になって頭から湯気が出ている。

「そうそう、リンはまだ幼いんだから、キスなんか知らなくていいの」

ミクのこの言葉で導火線に火が付いた。

「も～！！バカにして～！あ、あたしも、ルカ姉と、キ、キスするもん！！」

レンはリンの頭が爆発するのが見えたような気がした。

「ミク姉もレンも出てって！！」

背中を押して二人をレッスンルームから追い出すと、家が揺れるような勢いでドアを閉める。

ミクが開けようとしたが、すでに鍵が掛けられていた。

「リン、開けなさい、早やまらないで」

ドアをノックしても反応がない。

「もう、リンったら。…まいっか。ルカがうまく収めるでしょ」

「ミク姉、マジ？今の話」

レンが変な目でミクを見ている。

「ホントだけど…何？レンまでキスしたいなんていうんじゃないでしょうね？」

「ボクは自分で相手見つけるから、いい」

レンはあまり興味がないようで、さっさとテレビの方へ行ってゲームを始めた。

色気づくのはまだ先のようだ。

☆

五分が過ぎ、十分が過ぎたが、リンとルカはまだレッスンルームから出てこない。

「…遅いわね…まさかルカ…」

「ルカ姉が変なことしないでしょ」

十五分が過ぎた。

「…どうしよう、リンがオオカミに食べられちゃう」

ミクがそわそわする。

「オオカミに食べられるって、仮にキスしたって、ちょっとチュッとするだけでしょ？」

「……」

「ミク姉？何、今の沈黙？」

二十分が過ぎた。

鍵を開ける音がしたので、ミクはレッスンルームに飛んでいった。

ルカに続いてリンが出てきた。

ルカはいつもどおりだが、リンの頬が上気してほんのり赤い。

「…したの？」

ミクが心配そうに聞く。

「大事にとっとくんだって」

ルカがリンの頭を優しく撫でる。

ミクは安堵の溜息をついた。

「よかった～。いい子ね、リン」

ミクもリンの頭を撫でる。

リンは赤い顔のまま、拗ねたように横を向いている。

「ホントよかった。あんなキスされたら、リンのトラウマになるんじゃないかと…」

いってしまってから、ミクはハッと口を押さえた。
ルカが天を仰いで十字を切る。
リンの頭上に真っ黒い雷雲が渦を巻き、巨大ないかづちがドドーンと落ちる。

「あんなキスって、どんなキスよー！！！」

おわり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5080z/

ルカ、キスしたことある？

2011年12月17日04時59分発行